

## 巻頭言

著者	塚本 容子
雑誌名	北海道医療大学看護福祉学部学会誌
巻	11
号	1
ページ	1-1
発行年	2015-03-31
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1145/00010300/">http://id.nii.ac.jp/1145/00010300/</a>

## 巻 頭 言

### Think Globally, Act Locally : 大航海時代から宇宙ステーションの時代の感染症との闘い

交通網の飛躍的な発達により、「グローバル化」に対しての行動が必要、などと日常的に言われている時代である。感染症予防においても、2014年夏のデング熱の国内発生、また西アフリカのエボラ出血熱国内発生の可能性を例として、グローバル化による脅威がもたらされている。歴史的に有名な話として、1967年、当時米国の Surgeon General (公衆衛生局長官)であった William Stewart は、「感染症の教科書を閉じる時代が来た」という演説を行った。続いて1980年の WHO による天然痘撲滅宣言など、誰もが感染症を制圧できると信じて疑わなかった。皮肉なことに、それらの直後から1976年のエボラ出血熱、1981年の HIV、1997年の変異型クロイツフェルト・ヤコブ病、高病原性鳥インフルエンザのヒトへの感染、記憶に新しい2003年の SARS、などの新興感染症出現が問題となった。

歴史的に見れば、「グローバル化」は現代に起こった特異的な事実でなく、15世紀半ばに始まったコロンブスに代表される「大航海時代」から始まっている。ヨーロッパ諸国は、南北アメリカ大陸を征服していくわけだが、その成功理由の一つが感染症であったことは多くの歴史学者も述べている事実である。当時ヨーロッパ諸国で問題となっていた感染症である、天然痘、水痘、麻疹、ジフテリア、腸チフス、インフルエンザなどに対して、現地住民は全く免疫を持たなかったため、感染症により死亡率が上昇し人口が減った（正確な統計データは存在しないが、一部では全人口の80%という記述もある）ということである。ヨーロッパ諸国から持ち込まれた感染症もあれば、逆に南北アメリカ大陸から持ち帰られたものもあった。その代表が梅毒で、現代で遺伝子検査が行われ証明もされている。

「歴史は繰り返す」とはよく言ったもので、現代のグローバル化に伴う感染症の問題は、まさに「大航海時代」と同じ構図であり、一部異なるのが、抗生剤による治療が可能ということだけである。おそらくヒトは一生「感染症の本を閉じること」はできないのであろう。では、どうすればよいのか。Think Globally, Act Locally という概念が最も適切に問題解決の糸口を与えていると考える。この言葉を最初に使った著名人は誰であるかわからないが、かのピーター・ドラッカーがとある大企業のトップにこの言葉を送っており、著書にも書かれている。「グローバル規模で考え、地域のニーズを考慮しながら行動する」ことを意味する。この世の中、世界のどこでどのような感染症が流行しているのかを常に把握しながら、その対策については、個々の施設における可能なリソースなどを加味し実情に合わせた形で検討することになる。医療従事者個人としては、世界における感染症を含む健康問題に対して興味を持ち、もし同様の事態が自分の身近で起こったらどうあるかを考え、認識を高める努力が必要と考える。これを成し得ることが出来れば、ヒトが地球外に出ていった場合でも、感染症に立ち向かうことが可能となるのである。

第11回学術大会長 塚本 容子